

健康のしおり

皆さんの健康のお役に立つように、このようなパンフレットをつくりました。
是非ご覧下さい。

いしゆくせいちつえん 萎縮性膣炎

『萎縮性膣炎』は主に閉経後にエストロゲンというホルモンの低下によって引き起こされ、膣の潤いがなくなり、外陰部や膣が乾燥・萎縮して細菌が繁殖するために起こる炎症です。症状として不正出血やおりものの異常、膣の乾燥感、外陰部のかゆみや痛み、性交痛、頻尿などがあります。

エストロゲンは卵巣が分泌するホルモンのひとつで一般的にいう女性ホルモンのこと、というとわかりやすいでしょうか。月経や妊娠と関連があると同時に、生殖器や泌尿器の粘膜の厚さ・弾力を保つ働きをもっています。通常膣内は適度な温度と湿度に保たれ、細菌が繁殖するには好都合な環境です。しかし健康な女性の膣は自浄作用を有しており、膣内に常在する乳酸桿菌(にゆうさんかんきん)を主としたいくつかの菌が膣粘膜から乳酸をつくることで膣内を酸性に維持して余計な細菌の繁殖を抑える仕事をしているのです。

加齢(主に閉経後)や両側卵巣摘出後、エストロゲンを抑える薬剤を使っている方などエストロゲンが低下した状態にあると生殖器粘膜は萎縮し、乳酸の産生量が減り炎症を起こしやすく細菌が

繁殖しやすい環境がそろってしまいます。細菌が繁殖すると薄くなった粘膜の壁は充血して不正出血の原因となり、おりものは黄色～赤色で膿性、時には感染臭を伴うこともあり、かゆみや痛みの症状としてあらわれます。

治療は外陰部や膣の潤いを取り戻すことが有効なため、エストロゲン製剤の膣錠(局所投与)の使用が一般的です。エストロゲン製剤の全身投与や抗菌薬含有膣錠を使うこともあります。

現在、萎縮性膣炎は女性の高齢化にともなって増えてきている病気のひとつです。実際閉経後の女性の50%にはなんらかの症状があるといわれていますが、症状が出ない方や症状があっても気にならない方など個人差もあり全ての女性に治療が必要なわけではありません。しかしながら、挙げた症状の中には膣炎特有の症状とはいえないものもあり、子宮がんなどの重大な婦人科疾患がかくれている可能性もありますので一人で悩まず、まずは産婦人科医に相談してみることをおすすめします。

